



12
3416
21

南總里見八犬傳第六輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第五十三回 畑上諺く犬田を捕ふ
馬加竊ふ船虫を棄ふ

船虫の曉けく菩提所へとせ出せぬはる苗守小文吾ひとりをり復らぬ悔も
今あら小過去くくの暇る野猪といひこのやとといひ人を替又物を替てうが肉を危く
あるの今茲へらる星之出りく。まきく厄難のやくまが黄縁るりぬらん
はの猶も疑くくのときたよりぬがあはぬび尋思をまるふは。先高屋の暇あ
並四郎と故んとく撲傷の某とて。け。唐著の財布より沙金包の先生を
ごり藏ふふ暇あらく。笠の裡面は容措つ杖並四郎と呼活ふ。うが殺せ彼野
猪とんとわれ共侶は昔路へ還る。及び金を財布に収めく。うが懐は物

秋野
晴石院

わると彼奴の知られらるんは、いさよそのれ並四郎が陽中恩を復すと倡へく。己が宿所は誘引の殺し、金を奪んとく、斯もひ合され、彼奴の死、編よ旅客と殺し、路費を奪奪する年、來の強盜あり、今宵をたえく、此の悪心の起、まゝのれ、ぬ、おぼ、く、べ、り、あ、ま、む、このおれの造り、ま、田舎備、む、あ、ま、め、く、い、え、ざる、ふ、彼、首、の、壁、の、二、尺、な、り、頼、落、を、修、復、つ、く、戸、を、り、く、塞、だ、む、く、う、もの、あ、ら、び、昔、め、め、や、浅、草、の、石、の、枕、の、故、事、も、ま、ま、く、芳、ら、ぬ、癖、者、る、り、を、ら、ん、思、慮、の、足、と、ど、と、誘、引、ま、ら、伎、倆、の、涼、に、係、ら、れ、ん、と、せ、く、愚、さ、ま、ま、の、時、の、り、一、睡、覚、ま、ら、毒、悪、の、ま、死、ん、の、ま、然、る、を、女、房、船、虫、の、良、ら、ぬ、夫、と、知、る、ら、け、ま、ま、く、の、身、を、儘、せ、り、口、と、心、と、う、ら、い、め、く、只、己、の、ま、怜、悧、氣、の、ひ、瞞、る、飲、量、の、り、一、縦、彼、船、虫、の、素、よ、り、悪、心、ま、ら、ぬ、の、わ、り、と、も、出、処、正、し、た、證、拠、も、な、た、この、尺、八、を、う、ら、い、く、受、納、む、べ、死、の、あ、ら、ぬ、と、受、む、ら、必、夫、人、の、

悪吏と人あや生ると疑ふ。その内心のこまれば、つ、ま、れ、ま、の、あ、は、一、点、も、こ、れ、よ、對、ひ、く、怨、を、述、ぶ、身、の、薄、命、と、ち、敷、た、く、只、管、救、ひ、を、求、る、の、れ、を、授、け、を、ま、ら、聽、む、く、告、訴、ま、る、状、と、今、け、ら、疑、ま、ら、ぬ、影、護、し、と、お、ひ、ふ、け、ま、ら、ま、ま、げ、ま、く、要、時、の、意、ま、任、り、彼、女、房、の、ぬ、く、ぬ、回、お、ま、ら、を、あ、れ、と、遠、く、又、行、包、を、解、披、た、く、件、の、笛、を、袋、の、俵、よ、出、し、く、四、下、を、ま、ま、ら、り、衝、と、刃、を、起、し、く、又、衣、戸、の、小、棚、の、裏、面、お、容、措、つ、ぬ、ま、び、四、下、を、ま、ま、ら、り、小、縁、頬、る、蚊、遣、火、盆、お、握、太、形、の、樹、の、枝、の、一、尺、の、ま、り、燃、残、ま、ら、と、れ、究、竟、と、取、あ、げ、く、灰、う、ち、拂、ひ、て、わ、袂、へ、お、ま、ま、ら、林、と、巻、は、籠、く、故、の、如、く、ま、包、を、け、り、こ、ろ、く、ま、る、程、よ、ま、ま、窓、の、隙、よ、り、あ、ら、み、物、て、森、を、放、る、鳥、の、声、お、小、文、吾、の、縁、頬、る、雨、戸、を、半、開、繰、納、く、帶、締、直、し、り、臂、辺、お、益、も、脚、絆、も、物、と、り、揃、へ、て、船、虫、が、帰、來、ぬ、と、今、飲、々、々、と、待、程、よ、且、く、外、面、お、近、つ、く、人、の、足、音、お、せ、れ、く、と、お、ま、果、く、違、つ、ぬ、船、虫、の、遠、く、門、の、

戸開く進みの犬田中。今更のけりぬ。さむねびくおのれけん。菩提所の首尾
よ死まじよ。あら久済たりけま。あけは後つる。枕廻向の所化を遣りん。亡骸を
疾棺に斂めく。不覺入るるんれそ。住持の聖の宣ひぬ。とよ小文吾領
たぐそ。とよとせられ。れ。齋中もひ。とよ。往方もあ。ぬ人を索て。いと忙々
した旅をま。る。小後の。み。障。ま。る。ま。の。終。立別。き。ん。あ。の。横。死。の。自
業自得。悼。と。述。る。よ。も。あ。ね。ど。只。痛。し。た。を。き。の。薄。命。一。善。一。悪。夫。婦。と
形り。も。皆。是。過。世。の。業。報。さ。ん。た。る。人。の。為。身。の。為。ふ。仏。支。追。薦。肝。要。あ。を。香
魚。不。も。ん。あ。ひ。ね。と。い。ひ。ひ。恥。て。懐。よ。う。と。り。お。ま。粒。銀。を。紙。に。捨。り。く。亡。骸。の。母。り。よ
措。つ。背。向。の。り。く。免。し。ぬ。と。膝。立。直。し。着。る。脚。絆。も。遠。り。あ。の。程。を。ま。ね。別。路。
迹。と。濁。る。水。色。の。三。尺。も。拭。費。刀。身。あ。り。あ。く。行。包。も。肩。に。被。け。た。ら。し。れ。ん。
船。虫。今。の。田。め。あ。む。ぞ。れ。の。の。ま。り。よ。火。と。言。ま。り。朝。飯。を。り。も。進。せ。ん。と。あ。も。も。ま。る。

炊をせ。遺憾。と。い。ひ。り。て。門。辺。に。立。て。目。送。り。け。り。却。説。犬。田。小。文。吾。と。牛
嶋。の。と。渡。ら。ん。と。く。河。原。と。望。て。赴。程。ゆ。く。僅。ま。三。町。許。尚。新。し。草。鞋。を。ふ
締。附。の。端。緒。の。絶。れ。ぬ。を。よ。く。結。び。合。せ。ん。と。く。つ。ら。く。足。を。踏。伸。も。背。に。窺。ふ。捕
ま。の。夥。兵。亦。捕。的。と。被。る。声。よ。り。速。く。地。上。に。礮。と。蹴。倒。し。と。登。り。蒐。く。組。ん。と。ま。る。と。
小。文。吾。の。臥。ま。る。も。足。と。奔。一。働。く。搔。咽。も。又。反。久。せ。び。或。は。二。回。或。は。三。回。投。ら。し。め。
ゆ。り。輾。の。り。腰。を。折。れ。頭。を。傷。ら。れ。齒。を。折。し。血。と。出。る。各。々。罵。り。騒。ぐ。の。も。然。ま。も
ども。目。人。数。を。り。け。れ。ば。弥。か。う。ま。を。り。思。ひ。も。捕。ま。り。足。と。抱。縮。め。く。押。へ。く。索。を。を
被。さ。け。小。文。吾。の。い。ひ。ひ。き。ま。く。か。る。も。込。込。の。縲。縛。に。怒。ま。る。声。を。め。り。立。て。あ。を。甚。麼
る。狼。藉。を。犯。せ。る。罪。に。た。の。を。浪。人。の。り。も。兩。刀。と。腰。に。帯。る。某。は。一。言。半。句。の
他。は。も。ろ。く。索。を。被。る。も。あ。の。の。り。と。敦。團。の。声。も。曳。せ。ま。一。箇。の。武。士。こ。の
捕。ま。の。頭。入。る。べ。し。朱。鞆。の。西。刀。の。め。く。野。裝。束。し。く。十。と。携。へ。進。立。對。ひ。く。

小文吾を佐と睨ま。この癖者既よち事のため及る。陳むればとて免されんや。
 汝のむら。當家めく紛失する古代の名笛あり。山とい尺八を隠し持りと密
 訴のりわりの只この一條のさうぞ縁故を原ふは汝の昨夕阿佐谷る里人並四郎
 許宿投り。夜食腹のよたす。技は誇て件の笛を竊はさうし老を奪ふ並四郎
 訝る。この尺八も千葉殿めく。十六七年むより今も年々御示させて索ね
 る。笛は似る。要時某は貸の。さうの筋へりてさうくよく相違さるる。六
 と死價をいぐまわせん。のりて駭く汝が穢悪い。酔る体より果の誼
 嘩は事托せ。只一刀小並四郎が細頸丁と駈落し。逃去んとしける。
 わりの女房船虫の特は伶俐たりの。これの怨る。氣色をさげ言如此々。汝を
 賺し。とて終苗めく。走らせ。並四郎が亡骸を竊は寺へ送らん。為さく苦提
 所へ赴んといひ。あり。宿所をもち出。叔村長許ま。り。ま。く。箇様々と止。昔。小

とちりれ。赤毛檢の為。夥兵ホとせ。五七日當村は出役。彼処に止宿のわ
 くれは。拾く。起出。船虫が訴とみ。づ。巨細は聽定め。謀合せ。彼女
 房を宿所。の。く。ま。の。汝を。ま。て。入。か。不肖。れ。も。千葉家の眼代
 畑上語路五郎高成が。今。漏。天の網車。逆。蟻の要時。ハ。臂。を。振。ふ
 とも。被。了。索。の。嚙。入。ま。で。縛。め。れ。既。ま。ち。草。虫。も。も。勢。軍。り。首。は。別。る
 時。節。を。こ。ひ。絶。く。假。名。実。名。を。の。り。の。出。丸。四。郡。笛。と。盗。一。當。時。の。形。勢。箇
 様々々と首伏。其。阿。責。の。苦。痛。を。脱。は。ん。さ。く。ま。せ。の。む。と。辨。せ。と。く
 謹。向。へ。ど。も。小。文。吾。騒。ぐ。氣。色。を。く。ま。も。く。う。ま。は。誣。言。く。般。某。の。下。絶。行
 徳の民の子。小。犬。田。小。文。吾。悻。頼。と。呼。ぶ。れ。此。度。上。毛。へ。赴。死。を。以。て。伴。侶。を
 失。く。索。で。ま。の。地。は。ま。の。始。を。い。は。如。此。々。々。之。終。を。い。は。箇。様。々。々。と。
 高屋。の。野。猪。の。り。又。並。四。郎。は。誘。引。れ。て。下。宿。を。彼。処。に。曉。ま。折。並。四。郎。ハ

小夜深く路費の金を奪ふ為は還る。首と喪ひ。縛の趣如此々々とおちさく
生る小次第乱れどその折女房船虫がひつりつりハ箇様々々と贈りし笛の
まも述べ舞の委まきく説話らんとする程もさうさう杜依榛の樹の蔭より
出る船虫へ遠く語路五郎が前首よりあく涙を刀袷違必の偷児が
辯舌の迷されく鷺と鴉と諺をいひせうたてやりいひると秋現あそ
し口をうりよ朝榜よりれらる。論より證據は何もさうな憚りその行
包も振なく笛を宵さびつと實事秋虚言秋それを證據とゆるまやと声戦
しと怨むれば語路五郎領なくその怨むるさうとさうははあつちまもわ
やよ夥兵連その癖者の賊物をさくあくと取よてさうさう披く行包の内より
生る笛をさく一尺あまりの鹿角の残灰その他い思ふ。兩衣の外虫物もあつち
けりさういふとさうさう迷ひ解ぬ語路五郎より船虫の立てる又居てさくも

そとつあ有と。そえぬ尺八はさう。忽地滅る如く且驚れ且示れて面を皺め頭を
掻なら。骨々。はま今さう。人あ生る。もさく。あく。黄磔を舐り。啞
子もあく。やとさの。同疑ひの釋さけける。當下大田小文吾の左右を信と見
久りく各位何とんあひる。嚮あもよ。を報る。如くその夜さ。船虫。言葉
巧み。小彼笛を先祖相傳のりけ。と。其は贈る。事の虚実も心の邪
正も。い。知る。より。さ。う。も。い。と。穢れ。る。人妻の。その。今。何。を
受く。死。仇。と。さ。い。る。さ。う。ま。び。く。推。辨。は。許。さ。い。姑。く。その。意。は。任。り。介
後渠の菩提所へと。出。く。あ。た。る。笛。守の。程。件の。笛。を。臂。近。る。板。厨。の内。に
遣。し。置。死。し。これ。も。笛。を。包。て。さ。る。行。袂。の。形。初。は。似。い。さ。ど。蚊。遣。火
盆。燃。残。ま。る。枯。木。の。枝。を。卷。龍。は。く。そ。の。終。肩。よ。う。ち。掛。く。別。れて。彼。奴。を
立。出。し。欺。く。小。似。れ。れ。も。濁。り。小。深。ぬ。心の。潔。白。あ。く。至。て。正。は。知。る。彼。尺。八。を

船虫が先祖の遺愛をわくまじく並四郎が竊くを領主の空殿に蔵されば
 年々多く秘すけんそれを吾侪に贈りてへく笛の賊と訴くを實の罪に陥れ
 夫の怨を復さんとたくみ一賊婦の邪智奸計をあさるべし嗚呼懼ふこの外も
 亦證據ありその行状ある太刀迹の夜より並四郎が某事とどひひくも
 小横の上より刺徹し雨衣を破れりやても惑ひのまど暗く船虫を
 留めおぼく西三名の夥兵連を渠が宿所へ走らし錦の囊に納る俵ふ
 笛の板厨の裡面より又並四郎が刺徹し大太刀の蒲團をえくも席
 薦をえくも定めて紛れおぼくもゆり今さら躑躅かこらるといれて畑上語路
 五郎の慚愧は勝む夥兵下知しく且船虫をうち成らせ逆後方より
 くる村長を案内小立しくゆり又西三名の夥兵ホをせうしはく並四
 郎が宿所より到り屋捜せよと下知ける且くと夥兵ホの村長共侶たり

おのれ既坐はく報るや某亦並四郎が宿所を展檢してけふ果して編
 室なる低戸棚の裏面より又並四郎が亡骸は如此々々なりこの餘蒲團と席
 薦の大太刀迹人の出入せん為小欵欣落たる彼壁の為体はまるまぐまぐと
 犬田とやうんが口状と喰合せり先をこれを見せよといひ一人が寄て笛と
 遞与せば語路五郎の囊の紐を解きてもさく出して本末とさへり
 大泥小懸たこの樺巻といひ歌といひあは昔年故ありく紛失する當家の
 重宝嵐山の一節切は疑ひる原來件の並四郎この笛を竊るれば船虫が
 奸智のそ夫の怨を復さんと謀りし事蹟れ失る笛の出る可き々々
 と小勝を説く只管感嘆あさるける船虫の小文丑ふ伎倆のうらを缺れ
 あま至く一言半句も諍ひ誣るよのるければ怒まる眼小朱を沃く克相悪
 鬼小異るふ帯の間に隠る準備の魚切庖丁を逆ひも合せて囚めり良人の



八十八巻

畑上語路五郎

解出



両子と東
縛せられ
小文吾船虫
を麻挫ぐ

小文吾

八十八巻

八十八巻

雙言敵と叫びも果む跳り出走り鬼縛縛められ小文吾と駈んとするを夥兵們
 驚駭して立塞のまら狼藉不敵之鎮まわと制されども耳あもむき退る
 女流に似ける氣鼻暴早刺進む前を勢ひと且その刃は辟易しく左右なく
 搦めぬけりける透とゆふと船虫小文吾目まけく突懸る刃と外を身の翩捕
 壓へるも両の舟の背よかる縛の索も心も紊れぬ大勇避る刃尖あちちと再三
 一たび疲勞と足と蜚しくとと隈角舐れ熟る力士の突衝も船虫の要時
 の堪む弱腰撲まき横ぶる撞と轉ぶを起しも立む片足は林と踏まえり
 これぬを弱船虫の虫をりる息垂絶小血の氣の失く全身も眼も白く
 までも苦痛間るき程もわらむ夥兵小面るげ小食うち聚ひ立代下
 重索被る船虫と引起しくを推居ける當下烟上語路五郎小文吾縛の
 索をもちり解祛く傍に請とく辭を改め嚮ゆを玉石の分れむ片

言以獄を折めんとせ疎忽の一條今ゆる謝する小の事りの就中驚れあり
 傍邊両舟と括れらる極悪の船虫と括れらる武藝といひ替力といひ當今
 得か死勇士とせ並四郎ホが積悪度覚れ喪る笛の舟小入るもみは是
 所邊の呪のえれ宜く吹嘘いませ侍邊官途の情願あり武武者修行
 るとあつらふ今より當所は杖を駐めりか主君千垂米殿は仕へると可憐
 いれて小文吾うち微笑とを罪のむむしく辱めを受ふといども犯人立
 地はゆられ疑ひを解れり鉄びこれまほのま浮浪人といふも然とそ
 仕官の願うむ此度の旅も有りなく同行ホを失ふと索遣ま欲するの
 所要果この如よりと放遣りゆくと推辭を聴くを頭をうち掉すの
 今放遣る死仕官のゆいすれかすれ旅客なりとも領主は功あり然と
 えものけむり立別れる某の後日の咎めを脱れり侍邊がめくと留ると

姑くあはよ誤まらざらむとひひり殺兵が牽居る船虫を佐とてやそれ北次郎を
 抱きて自まつを忘れぬは非義の怨をりて大田ぬを殺さんとせしとれ殺兵を
 救は女流とてひ悔まき不覚の働をたこれどもつちみづり逆へ殺むに捕
 工のと易しるれども持て大切なる笛を損ふとのやとてつち遠慮せしむ小文
 吾らのを芳しう。つても挑むに陳ぶる飲身より出る縮鎗は縫もえに現天
 罰ぞとみづりつとひ諦めくわう一山の尺八を並四郎が竊る事の顛末同
 類まぐ首伏せむやと責問へ船虫は低俯る頭を擡ぐ冷笑ひひひひひひ
 向扶ふ勢ひをりて威せぬぞ。またとていふ吾侪ははるむ同類の名をばつてを
 うち出まよ難くものねど人の痛まきまきとゆふんととゆふていひぬが遠く情緯の
 ちろをの知らぬ山家老さるは回めぬ氣疎た人の鈍すや。とひひひひひひひひ
 五郎の眼と眸と肘を張り怒るる声を戦々々々慮外の嘲哂大膽不敵是

奴飽まで鞭懲さむ。輒く実を吐くものむとて責よと敦圀く折から高
 屋の村長走りあわく刀袂をら知し召れぬや守火。千葉女自小鳥獵の為とて
 今朝も御館と出させむひく。あらを逍遙しぬをわかん間も遠くむとて
 かんあつねのぬぐりやと報ふ敬篤く語路五郎の殺兵は下知して船虫を阿佐
 谷の村長許牽りてあらし又大田小文吾もま宿所は伴て酒食を羞む
 款待せよと阿佐谷高屋の村長ホよ言葉せし。分付て食共侶は追立
 遣しその刃の道次よつねわく主君自胤の過りぬを遥よりちを待程千葉
 女自胤の鳥網吹箭藪竿まきとて近臣ホよ持し。四五十名の後者を後小
 後へ先立とてあまふもみ近つたぬは眼代畑上語路五郎が道次は額つ死
 むらさちを訝立留り近臣とて故りやめると問せぬよ語路五郎を
 わらく小膝を進め。並四郎船虫ホが悪事の顛末を始とて旅人犬田

小文吾が智勇の勳に如此々々と云ふも多し入るなり山の笛のりまて送
 るく告すうらけの件の件の笛の笛と懐と懐よりさう出さう出て返返すあつたれが自自溜溜のの毎毎
 駭駭死死嘆嘆一一且且歡歡くさうさう笛笛と囊と囊より出出てさうさうらりてさうさうのの戴戴冠冠の比比
 謬謬く小小條條落落葉葉の兩兩刀刀とこの笛笛とさ失失ひひより年年々々小小徇徇知知ささく穿穿敵敵金金
 懈懈ままたれたれがが盜盜賊賊ささうう必必く頭頭れれ復復この笛笛とさつつるる勢勢ひひ何何ののこれこれささまま死死
 彼彼船船虫虫とららの賊賊婦婦とと緊緊くく鞆鞆問問ささらんらん中中等等くく失失るる兩兩刀刀ののめめびび出出來來る
 りもあつてさうれれ件件の小小條條落落葉葉の先先君君相相傳傳の刀刀ああららぶぶ只只假假染染の秘秘藏藏の
 笛笛の當當家家の重重宝宝ああつたつたがが此此岷岷山山の片片玉玉は勝勝りりああららふふををのの盜盜賊賊ののつつかか知知るる村村は
 年年來來ななりりをを汝汝も亦亦村村長長ホホももけけすすでで絶絶くく知知ららずずのの怠怠慢慢の罪罪ありありとといいふ
 此此度度の功功のの償償ひひははせんせんははああららむむ彼彼犬犬田田小小文文吾吾ととああららんんのの言言くくはは智智
 勇勇の武武士士ををのの浪浪人人ああららんんああらら左左も右右も説説勸勸めめ當當家家の股股肱肱ととななるる

わづは是は汝達を忠るべしは獵獵ささまま小小鳥鳥よりその大大鳥鳥を獲獲ままははけけれれととを
 也也どもどもああららむむののよよとと馬馬加加大大記記は報報知知くく渠渠よりよりああららむむのの歸歸城城せん
 比比及及ままでで犬犬田田とと厚厚くく管管待待くくああららむむををよよららぬぬととせせよよららとと叮叮嚀嚀小
 ああららむむとと床床几几ををままちち衝衝とと立立ととたたりり近近臣臣小小笛笛とと持持とと真真官官成成衰衰輪輪の
 くく過過りりああららむむ語語路路五五郎郎ののああららむむ背背汗汗をを流流ままささいいとと恐恐れれ且且恥恥て目目送送る
 り半半响响ををりりああららむむのの起起とと膝膝の塵塵埃埃をを拂拂ひひ村村長長許許赴赴たた事事熟
 らら夥夥兵兵兩兩名名と石石濱濱の城城小小還還と長長臣臣馬馬加加大大記記常常武武の事事の趣趣を報報知知せ
 その使使ののああららむむああららむむみみづづらら不不益益とと勸勸めめ小小文文吾吾をを款款待待まま程程は秋秋の日日既既ににああららむ
 むむききでで末末ののああららむむ過過ままけけりり浩浩然然と石石濱濱遣遣ららるる兩兩箇箇の夥夥兵兵くくりり來來て某某小小衛衛將
 馬馬加加殿殿の宿宿所所ままああららむむ口口状状と演演ららるる且且くくと執執繼繼の若若黨黨ととああららむむ答答あり
 旅旅人人犬犬田田小小文文吾吾をを語語路路五五郎郎伴伴て城城中中へへ還還ららるる又又賊賊婦婦船船虫虫ととああららむむ

けしむ。村長の先逃。莊客を召集。地方の里人。三二十人。馳催。七
 舊所へおれ。人影。中。取。小草の上。断棄。捕索。送り
 元の。原。舟。奪。去。れる。て。同類。悪棍。所。為。と。思
 とも。その。一人。捕。釋。立。た。り。路。傍。の。額。を
 集。商。量。小。夜。深。折。衷。前。再。説。知。上。語。路。五。郎。高。成。と。大。田
 小。文。吾。を。伴。て。日。晡。時。石。濱。の。末。長。臣。馬。加。大。記。常。武。が。宿
 所。有。切。の。旅。人。大。田。小。文。吾。を。報。帰。城。の。常。武。老
 僕。大。田。の。旅。人。と。客。房。之。休。息。を。語。路。五。郎。今。出。て。對。面
 せ。と。り。と。老。僕。の。果。立。ぬ。か。せ。知。上。語。路。五。郎。の。玄。關。の。側
 有。編。室。の。女。と。候。程。小。秋。の。日。も。没。果。當。下。馬。加。常。武。の
 若。黨。燭。を。秉。し。や。土。圭。の。間。小。坐。と。口。を。あ。と。喚。入。語。路。五。郎。

阿とむり。忘。膝。行。頓。首。の。障。敷。居。と。躑。さ。せ。齧。も。止。口。の
 並。四。郎。船。中。の。顛。末。且。大。田。小。文。吾。武。勇。の。又。阿。佐。谷。の。田
 中。の。尺。八。を。主。君。自。胤。進。ら。せ。る。辨。の。趣。如。此。々。々。と。も。尾。を
 演。常。武。の。冷。咲。ひ。の。並。四。郎。の。奴。小。文。吾。を。殺。さ。ん。と。謀。り。一
 定。の。件。の。笛。の。失。昨。今。の。あ。む。を。廿。年。は。近。け。れ。必。ず。も。並。四
 郎。を。賊。と。定。め。て。贓。物。と。さ。せ。て。物。買。を。あ。せ。る。を。れ。か。も
 の。と。の。よ。う。と。逸。速。く。俺。們。告。ぐ。中。途。主。君。小。時。を。あ。げ。贓。件。の
 笛。も。俺。們。の。存。ぞ。と。途。主。君。小。進。せ。り。鳥。辭。を。い。ん。越。度。と。や
 いら。ん。の。職。あ。む。と。り。自。計。ひ。の。長。臣。を。悔。め。て。當。家。の。法。念
 建。奈。何。々。々。と。声。高。ま。い。ひ。懲。さ。れ。て。語。路。五。郎。の。頭。を。席。薦。を。瘡。の。返。と
 辨。も。り。け。の。常。武。呵。々。と。ち。笑。ひ。て。ま。て。和。殿。が。出。來。過。る。け。の。小。限。ら。ね。ど。

此度の用拾まて又後日議まき彼船虫のいふまゝと向けて僅小
 頭を擡さしは裏の某夥兵もて下知と伺得て大田の多くを乗れ船虫の村
 長の預置くをよめれその故の如此々々と乗るゆへ彼処へ遠く出でこの
 甘も果て常武いゆへび声をゆり直ぐその甚くは錯誤のひひつら然るは
 船虫の牽りて来よ大田の長途の疲労もあはれ今宵は且村長許首をよ
 めれと答へるを何とぞ願ふは彼船虫の女流の似けは癖者るを武執系陳
 農夫ホの任と捕も逃れぬ笛と共に紛失する小篠落洛並あはれ両刀を
 索るよか平使に立る夥兵ホがは違ふとありとも二歳児もは人理の當然
 その職に居てもつるも大くは罪人を為し困りと失あはれ抑誰か越度を
 和殿みづり彼処に執たて船虫を牽りてついで今宵獄舎に敷系を急慢の罪
 脱れり。さてもと縋りては論議は小夜の更まて語路五郎は権威を怖れ

隻言一句も陳れぬ理を非に枉膝節の折るをり居縮まる瘠痺の京登
 らむともやなる阿佐谷村の過とをく勸解をせむ宿所のわら猛夥
 兵もは聚合く石濱の城戸をよと死総泉寺の鐘鏝々と夜の更まき

第五十四回 常武疑く一犬士を囚ふ
 品七慢は奸臣と話説き

却説畑上語路五郎の蕉火の路振照も夥兵ホをよと阿佐谷村へ赴く
 程もくともま六七町は過ださるれば人わま前程の小草折敷で何やえ
 嚟々とうち相譚の声しけれぬくあろ怪と近つて小呼かけくその何
 のとと谷まは是則別人るは阿佐谷村長が社客們とある聚合を縛の
 僉議とまらるりの當下村長のと面をげは立ぬ道次は額とつれ所眼代さ
 某未と救せぬとち勸解れは社客們も異口同音小か慈悲と仰たす

救のせあへと叫ぶゆを語路五郎訝るく汝木の船虫とち成るをききよ何等の
故のあふ聚合は且つれををて救ひを乞ふと一切のあつとほむおりの狐ふ
魅される然らば汝木が狐を魅さんと欲するともうれ豈をの術に乗せし
れんや疾正躰を顯さむ目よれせんともうちの刃の柄の摧るをうり小握
詰てを睨まへる氣色小呆る村長木の忙慌を抗く脚眼代さる早らせ
ゆる狐の所為でいひらば察する所同類の悪棍木が所為さる響は船虫を
ゆるきよれといひ下知状とありて殊さる夜行の用心とこの莊客們八九
名と彼罪人を守護しつこの処まぐ来る程木の杜の樹蔭より許りの癖
者顯れゆく或は鳥銃或は白刃得物々々とうち放ち振る暮馬直小
敷んとこれより後とまうゆばともい推量も定まる一収近死里人木を
駈催く加勢とつゆびあよあくるれい人ひとりもどふを只断捨る捕

索の小草の上を迷入り一の既よる船虫を奪身ひ去られて刺癖者ひとりも捕
ゆるれいまう一釋の立ちかんのいよせまうと額を集めて商量果ては折り
思ひろくは処を過せぬよ度と失ふさるさるの後悔ありの恐れ入るゆと
告る小駭く語路五郎の野兵木と面を合して呆るこ平响なり忽地声を
苛立ると甚胡乱これ決て船虫をゆるとあれといひ下知状と遣せりい
その状ゆらとせよといわれて村長遠く懐袂擯鼻禪を掻撈りも
揮てアとも鼻紙さるるりけり悲や嚮は逃るとあり落せしと身と起し
月と燭は彼此と草推して索れはまうく焦燥語路五郎頻り小轟つ霹
靂火の隊まう如く声あり費り是奴逃とく逃さるや汝木不覚は船虫を捕
逃せぬめらむとて同類小相譚れ渠を落とさるる虚言とほらるるんり
夜を犯して出て来るも馬加殿の指揮より彼罪人を想ひたす獄舎に敷ん

為るも汝ホが越度とて連係せられ朽きさよ一人も漏さず縛めまると烈し死
 下知は親兵衛一撥とま蒐く村長共二十人許數珠敷糸めつけられ皆
 面色は米の如く戦慄れて齒も合ぬ口も唱は念佛と雖も夜虫の鉦鼓三宿の
 妻子のまら虫といひ鳴る冷虫のまら虫報過世の業と悟ふかおひひさりくま
 翌日の野の螢より先ぬ滅んとうち歎く追立させ語路五郎の石濱の城は
 帰るとまらその夜の中は村長ホと皆獄舎を敷きせける程まを曉がま
 るり語路五郎の馬加が門戸を敲入るはあはれをせよとせよとせよと
 臥房入りより既小天の明日の日升て己の比及するは遅るをけりと忙々
 衣裳と改めく出るは馬加常武の既まを問注所在りとおぼくこれを
 召る使に遭ぬ胸うち騒ぐを鎮めぬは使ともまら常武の常武の常武
 こびり彼船虫といふまると問れて語路五郎敵まは由る村長ホが不覺を

船虫と解者ぬ太専まされといひ一條をわたくし報知く彼村長も莊客
 ホも堅く禁獄せぬるは同類と穿鑿せぬ船虫を捕へとも遠く
 そゆりものも果て常武の勃然とく眼と睜へられはつそゆりもの
 船虫をまらる村長ホが罪輕なるぬと渠が宿所は苗め措て縛と
 る不致一和主が罪のゆくり重り誰の目も奴をまら搦めぬと呼り
 声も當采曲の若侍ホ西二名阿と忘てまら語路五郎を縁頼より雀落
 一推伏せく忽地まを常武獄舎に送るは陽光もまら
 けり程は阿伏谷の村長莊客ホが親族妻子の事の趣を傳はて駭歎
 くと大くまら日母は石濱の城まをりく長を訴へ或は田を奪り林を
 售く竊小馬加主は物のまら贈りく大約一月のまを麻で村長ホの
 幸しく金禁獄を免されり只如上語路五郎のこの恩赦ぬゆり

あく獄舎の中より身まうりければこれと憐むものなり又議るものゆへに渠の年
 末氏の言肩腰を絞るる悪報ゆく馬加敷の鬚の塵と採損ねより憎むる。
 可憐命を預けぬと竊小これを評するれら妻も迫らる世を去るる歎きを
 送る子もみれば口親族と朋友もその亡骸を葬まけり是より先千葉
 女自瀧の失せ年歴一嵐山の尺八のみ入りよりその日の夕帰城と彼犬田
 とつ時えりる勇士の心を高成の常武は告る彼渠と當家も笛めり千騎も
 優るべしと對面せまほしければとあつひも長臣もがまうりもぬぬ小
 召出せまうりのまければ且く黙止多程よ次の日馬加常武ひとり後堂小見
 参りて名笛ゆび宝庫の返り悦びを述まうり且阿佐谷の村長も
 謬で船虫を走らるる緯の趣并小畑上語路五郎の罪科の首様まこと
 吹えわけて渠の禁獄せえりる言八方部と彼船虫を駈索ぬ追捕

輒くひ一縦往方のまればとも原是匹婦のゆるれば喪家の狗も異るるも
 終ゆみづらう斃れんは賢慮あるゆへにと異もるげまうりも自燈明て
 眉を擡め失る笛の復るとどもも彼賊婦を鞠回せ小條落葉の両
 刀のそであるともめりる語路五郎が疎勿ふりて村長も過失の禁獄
 りれも法は當まりありの賢君の古田名物と宝とせば良臣賢者と
 貨ととも尚書小本文えくるまうりも彼犬田小文五郎り渠が野楮を搏り
 又並四郎不行包を刺せく輒くこれを撃ち笛め又船虫が贈りくる笛を送り
 奸計の拙を缺た大勇明智賞感尤浅く其方も亦このあつる旅
 館の管待等雨るるまの勧め當家小仕へさせよ遠くは口とせ對面を
 へるるまのついで常武小膝を進め仰ぐゆへも彼小文五郎りまの

並四郎は鎧を刺れて弱り果て野楮るる撲殺をも易くべし又並四郎を
害せし欺敷るるも柄あるるに就中彼笛の小文吾が所持せしめれり後
難とせしより竊木板厨へ送り置たり飲これ亦知るべしはめれり先船虫が
訴出が実事也小文吾が陳する所虚言せしめめり飲りきりきりし船虫が
冤枉を憐むりの渠を奪うまきせり飲船虫既逐電して再度の糾問は
よまければ何をりこの疑ひを解死ゆき然る今更小文吾の御對面は
るる物体多くそひりめと憚る氣色もあまうまうが自亂且沈吟して
る趣理るたよめれり疑ひ人ふよる郷向小文吾が進退を傳ゆり
つゝその人とのをせり詭譎をりて人と虚げ廢教言を求く僥幸を欲する
のゆめをくらげ再三再四の勘辨をのまほしけれと宣へ常武武をせいの
惑ひの愛まると憎むとの深死を起せり縦小文吾智勇あり言と行の

正しくとも尙敵国の間者もく怖るべきのゆめをせの故郷に下總を行
徳もるのれとて父の孝胤ぬの腹心は時千葉の城なり然るま里見飲
許我殿成氏の間謀者もくいん凡智勇は捷きりめの人を用る戦國は
主ともせむ虚々と諸國を流浪せんぬるもゆる今愚意をり
致んぬるもく小文吾を獄舎に囚へて台を重く責懲しめり敵の間者も
首を河原に殺し後末を成む是當家の武威を示せ第一義は
こそひと言垂示巧は説破れば自胤ぬび沈吟して敵の間者と間者や
ぬち實の測りぬりと父とも假深るる功ゆめれを賞せむと西訓せんぬ
よろし沙汰ともおもほえ事真偽の知るる限り只らつるも當め置て
日毎の郷食応答の問るるむのや敵國の間者もりとも志を轉して遂に服
従するあんこれより外おせんまると又他事もり宣へ常武終は拒

難く。あつて彼小文吾と某は預けぬ衣食の賜の。あると書平と真偽を拂ひ
 ぬらんといふは自胤歎しげふ疑心暗鬼を生むといふ疑心なり。わりのとも同僚と
 合議して疎忽の相計ひまゝとせむと傲めたまふを常武の生忘して退出せしめ
 程小大田小文吾のその日よりして馬加の客房に留められ朝夕の饌を差遣り外由の
 訪慰のれもる。わりのとも對面せしめければぬくあつて小訝り胸安くぬ旅宿の
 床は昨とくく今と且せ。一日の千載は異ねと憂をせむるのけり。かくて
 三日小至り家の老僕袖角九念次と呼ぶもの小文吾と何よりよまて主人大記の
 口扶ゆゆよるの務は暇まで宿所をを稀されが款待もさ疎まらんを
 許されるさひるる。けりぬく半日の閑暇をゆゆぬ對面しぬんといわれり。
 誘ふといひて先はなや間毎の紙門を押開々々と奥より小書院に
 行く程小馬加大記常武の縮羅の単衣は精好の袴を穿て聖柄の短刀を横

佩年十二四の重扈徒は大刀を持て後方は侍り一間の樓林を背ふしと
 優る半し。その縁頬の肥く色黒く力士めたる若黨四五名蕉布の袴の
 稜取るが各々二尺のちりる巨内刀を帯て肘を張り肩を怒り。こまこま
 半る眼睛素破といわ組も伏せんとせ首構を。此もこの馬加が太く傲れる
 威権の自胤十倍たるが。當下老僕九念次の遙よのドの方に向
 ひく是る人天田小文吾ぬてゆと謂を執り退く程は小文吾の進んで紙門の
 裡に入り恭く額つたれども常武の只膝もを加えのそゆく礼を復さむ。
 側は措くる扇を取らあへくと呼近づは小文吾の肩其舊の刃をそり然とそ
 臆せし乳色もま常武うち對ひ其不測のり小よりて當所は抑留せらる
 る二日千秋の思ひの偽もせむひけん途小同行を失ひく索遣ま欲まは
 のこ笛の盜賊のあられよりさる所要もゆまは。そく放遣せんこのそ



八天傳六轉卷三

洲島堂

八天傳六轉卷三

洲島堂

願くそそのへとのふ常武領にて愁訴寔の理り其その誼をどうもをせしむる
 一と限りまけれどいふせん自胤和殿を疑ひぬが縛速由決一ゆりその故も
 彼のうー山の笛の和殿の船中贈ると陽受く板厨の中へ送置てこし
 るれども受ると授とるの證據も一只見のまらうと當夜中途の癖者ありて
 彼の船中を奪取りぬ身ふより再ありま船中が首伏の苦痛も堪ぬ虚言ゆく
 冤枉を憐むのの奪取まきまきしる然れども亦料も一是疑ひの二つをび
 され加ふは和殿の智勇兼備の人武藝も亦雋れり人を用る戦國は往と
 ろくと售れざしと流浪せしるまらるのめり身疑ひの二つを察まはぬ
 千葉の孝胤の間者るるも里見秋時我の間謀者るる速に禁獄して予が
 推量小違ひの首と河原の殺身と武備と隣國の事と一と君命嚴るる
 のれり某もよく諫めぬも真偽明白の證もられぬ某も疑れぬ殆寒心

ゆるとヨラり今且く候ぬ某方便を旋らしく主君の疑ひを解合は進退
 その意は儘まきとわれぬ教馬く小文吾ハ又一層の患ひとまき刺る如き
 胸膈よさるぬやうさる足ともびひひの貌を改めぬひひけえん疑ひの理り
 とくも覚ぬぬ彼船中が逐電より還る某を疑れて拒ボがまら死首伏は寔
 支るらとせしる抑いさる道理を又某を敵との間者るるとせられぬ人
 行徳へまきりて彼外の人人本は向ぬ舊里ある母老父あり其のまき五斗米に
 腰を折ぬ人の為は刺客とある初市人今浪人古那屋が男兒となつ孫
 めの隠れぬうもいひぬこの義我をいつ今一度某がぬ小諫めぬ彼を疑ひを
 解もんの春の水の如くさる愛顧を祈まなると只管小請未れ常武頻は
 嗟嘆していひ趣みま理ありまられども行徳の當家の昔領るもの今今を
 千葉の孝胤ぬの采邑され敵地といとる輒く人として和殿の素生と問れぬや

縦回ふよりむ里ととも歌地の人の世を實言と信ん疎るべし。そのむかとも
 今速小和殿を放遣んむのちちうふ及びうう。氣まき時と俟ぬと親切ゆる
 せ便位利口ふけ引くぐもわふれと小文吾の慨然とまよふと忘せむ
 常武これを慰めく犬田との時あらむや近死比ある人の歌ゆも。そむむを憐れ
 ざうまを旅人のあとより霽る野路のむ雨短慮の功をうう。うを限り
 と定りなうぬ逗苗のゆるる小母屋も人の出入敏急と煩しぬりうう。小
 庭のわねふ。此小の幹浄房ありけより彼処小起臥し志を頭ひぬ。
 衣食のゆ。その餘のゆも心つ死るまことゆ。び隈る老僕も。如此々と
 いひぬ復てを對面まなれといひ果て身と起し童扈從を隨へく。あつう小
 奥へ退死ける小文吾の常武が君命は假托し。それを留るるべしと既し意
 中。小曉りふければ敢てゆび争む。老僕九念次小誘り。れ。幹浄房もあはて

なる小二間小九尺の敷奇屋ありと浴室あり廁あり。その次の間ハ席薦
 繰小三つを布く夜物と藏る板厨あり。あるの庭より覓て曲演水盤
 ると水と沃する夏を宗とまれば。四目色小咲く芳宜の時より顔る。
 神影石小倚る小松の挿頭白る夕日と抱く寒蟬のいづれの杪を朝露
 消る丹鳥のこの草より渴すると死の爐は百年の金あり。倦ると庭は冊歩の
 地あり有敷系小眺るなやぬと惆悵する心の真愛の亦遺るるもさうりけり。この処
 三方ハ流糸垣ゆと南面小諸折戸あり。何れともるを異なる。常小わねとより
 鎖しう。これ罪をくして林足囚の如く旅館さねがう獄舎小似たり。これより
 後男の童ホがこびの飯を贈本ぬると老倉頭ホが月の中。小雨三日庭の小
 草を刈拂ひ落葉を掃除し。まぬのさるれ譚敵とさうりも。う。う。う。
 中。生憎小過る。陰陽とさめあひる。小文吾頗は焦燥て憂苦。堪む天

うち仰死おほのまれば枉津日まがつみの神かみのまうむ移うつりくま縁ゆかりくままま相あひまをありまるべ。
荒茅山あらいやまの厄難やくなんより別れわかれし四友しゆうの存亡のんぼうを夢ゆめふも知しるまく預あけられる両箇りやうかんの
女人にょにんの往方かう今いま小定せうているまむ昔里せきりの親おやのち喜よろこぶまむむむ死しの
齡としゆゆくく侄わらわの尚なほ鳩車竹馬たづまの年としゆゆ有ありまるまこれこれををひひ彼かれををひひ身みのあまり
といいとも心こころ四方しやうほう小せうままるまぬ日ひもも平へい説せつはは火宅かたくの煩悩ぼんごう苦海くかいの風波ふうはの
これこれるまるま是こゝろ併馬へいば加大記かいたきが妬諱ねたごんより起おこりてま虐げつららくまこのまくくの如ごとくく渠みちのま好曲こうきよくの
小入せうにりりり誠まことるまるまねね大功たいこうの細謹さいじんを顧かへむま大礼たいらいのま小讓せうじやうを辞ちげまるまををすまるま
の諸折戸しよせつこを推破おしやぶくまゆゆんまこの難なんももああららねねどどこのまららもも鎖さをを披ひらくまいいまま
城門じやうもんをを出いされれんまやや勅しやくはは抑留おしりゆうせせられればば求もとめまるま恥辱ちじやくをを思おもははるま小近せうぢんいいふまままととここ
胸むねのまどどひひくく飛鳥とびの翅はねをを死しとと恨うらみま不樂ふがく音ねをを鳴なねま果はるまるま
籠かごをを養やしやれてれ友とものまささ色いろ時とき墓むるまもも又また夕ゆふれれのまりりけけりりかかくく秋あきゆゆきき

冬枯れふゆがれの寂さびしし宿しゆくはは年暮としくして明あれれ文明ぶんめい十一年じゅういちねん春はるも二月にがつよりよりいいくくこれこれのま
ああららるま人ひともも死し庭にわの花はなのまいいくくるまいと美うつくしく咲さく程ほどはは彼かれ而しとと蒼頭そうとうの常じょう
よりもよりもああららるま目めくく草くさをを刈かりけけりり中なかのま品しん七しちよりより老らう倉頭そうとうのま小文吾せうぶんごを
訪たづねねめめく木訥ぼだつるま物もののまいいささるま老実らうじどどころころれれられれ小文吾せうぶんごもも亦また隔へるまをを
鎌休かまやすの折せ毎まい煎せん茶ちやを飲のむま江湖えいこ上かみのま今昔いませきどどころころれれられれ小文吾せうぶんごもも亦また隔へるまをを
ううぐぐ品しん七しちゆゆくく飲のむま親おやをを思おもははるま程ほどはは一日いちにち品しん七しちよりよりままるま日ひをを死したたままるまことことれれが
午餉ひるげ過すぐく縁ゆかり頬ほはは尻しりちち拭ぬぐま越こえまひひとと小文吾せうぶんごこれこれをを勞らうひひてて又また端はた近ぢんうう出いでで
ここほほをを品しん七しち要えい時ときををととてていいまま苦勞くらうををああららままるまままのま人ひとのまららのまどどけけくく浮うれれ終しゆう
るる花はなの春はるふふ面おもて色いろの病者びやうしやめめたたるま瘦やせささるまんんををささせせああままをを現げんをを該がいでもでもああんんくく
不測ふそくのまはは拘くわわららひひてて旅たびもも人ひとのま門かど出いられれ困こま龍りゆうらられてて既すでにに也や一ひと歳さいちちくくままりり
ぬぬれれいいとと痛いたくくままのま又またせんせんままももままのまのまららるま人ひとの過世かぜの業ごうよよららてて知ち者しやもも勇ゆう士しもも

趣合あつく生涯せいぎや頭あたまと擧難あがりらむ世よをの儘まま行くの近ちかいこの武藏むさし大塚おほづかま
 犬塚いぬづか番作ばんさくといひ猛者もうさの家督けとくを姉夫あねむこの横領よこりやうせられて憤おこりあ堪たざりけん
 腹はらを斫きて死しひたその獨子ひとりごも親おやは方かたらぬ器量きりやうありと人ひとをいひがいつふあり
 けんよの知しらねど今いまをの迹絶あととぎりてをかれが智者ちやうでも勇士ゆうしでも時ときに遇あはれ埋う
 れて人ひとも知らぬまじきものれり。され人ひとと七轉しちてん八起はちきとらふ世よ話わもあふふる年とし
 ころくええのいふや一年いちねん二个月にがつ囚徒しうとは等ひと一ひとれも隨意まじなる日ひのまゝとせむらあ
 まいしく物を思おもひ命いのちを縮ちぢめるものとよみつら心こころを長閑ながいくめちて厄やくの國くにを待まち
 むひのと慰なぐさめられて小文吾こぶんごの曾そとうち騒さわぐと推鎮おしぢんめりて趣理おのづかりふれも亦また犬塚親いぬづかおや
 子の名なのい豫よてはるまゝ和殿わだんの相識あひびとまり一ひと飲いと問とれて品しやう七頭しちづゑをうち掉ふす否いな
 相識あひびといひければ大塚おほづかの里人さとびとは糖助とうすけといひれり。そが先代せんぢより由縁ゆゑんあり渠かれが世よ
 在あり一ひと程ほどの訪まりも一ひと訊きれぬせよより。そが噂うわさをばけり。現世げんぜ間のさあぐら高く

いられぬまゝ。その權かり馬うま加殿かだんいといとあそり。た人ひとをまごもまゝと毎ごと日にち苛いらしく謀ま
 課か守まもりまても憚おそりあふ甚い麼まる過世すくせのやえといふ。小文吾こぶんご膝ひざを進すすめて
 その縁ゆゑん由ゆゑんあり。世よの若わかくは筋すぢありとも。これ他郷たけいのりれるふ。あまは緯いと回まわり
 人のまければ時ときとも外ほかへ洩あやまる。さううちわいひひ。とをのさされて品しやう七しちと頭づゑと搔か
 ちく四下よんげとんえり。あやとらら。のい辭ことば些ち々々慎ちかま深ふか人ひとととゞ彼かの一條いちじやうを告つげ
 さん忘れても洩あやまはも及およせぬひけん。のり亨徳かうとく四年よんねんの秋あきのころ下総しもさねの千葉ちや
 家いへ二流にりやうに分わかれて合戦あつせん已やむる。縁故ゆゑんを原もとに當君あつみ故むかし千葉ちや胤直いんぢく主ぬしと
 高弱たかじやく冠かんする。千井ちや保たの一族いちぞく原越はらえ後ご胤房いんぼうの御我ごがの御所ごしよ成氏なりぢ朝臣あそぢは後ごひ
 久ひさと薦すすめり。圓城寺えんじやうじ下野守げんげしゆし尚任しやうにんの鎌倉かまくらの管領くわんりやう小後こごひ久ひさと諫いさめり
 久ひさ胤直いんぢく遂つひ小圓城寺こえんじやうじが談論だんろんを是こゝとて鎌倉かまくらの管領くわんりやう方かたよりあ胤房いんぼう久ひさ
 憤おこりて成氏なりぢ朝臣あそぢ小加勢こかぜとを受う千葉ちやの馬ま加陸か奥おく入道にやうだう光輝こうきと相共あひとも軍兵ぐんべい數かず

千と引率して同國ヲ胡志摩の二ヶ城と攻潰し、大將胤直ぬ詰腹を
 切らせしむ。胤直の父前千葉入道常瑞、舍弟中務入道了心も亦一を
 腹とせめされけり。これより成氏朝臣の沙汰とて、陸奥入道光輝の嫡男孝胤を
 千葉公に任し、千葉の城に居置れ、又管領家の沙汰とて、康正元年の
 冬のある入道了心の長男實胤と三郎胤直を執立て、武藏の石濱赤塚の両城に
 居置れし。千葉家のいづれ二流に分れて互あるが、怨讐の鏖たるに磨
 らひける。孝胤ははてしなく千葉庶流の郎黨に馬加記内常武といふのありき。
 孝胤は仕へ、その刃過るのり、下総と速電、石濱殿へ降参し、千
 葉の爲体と演説し奉公無二に進止の程は實胤を登用して、遂に長臣と
 する。久し記内と大記と改め、持し時め死榮けるが、程は實胤ぬ。一年來
 又病するが、遁世の情願あり、家督と舍弟胤直を譲らんよと、諺めよ。

馬加常武、兼く杜裏の赤塚の城中に栗飯原首胤、度龍山逸東太
 縁連といふ、両箇の老黨あり、いづれも當家の一族あり、就中胤直、下総志摩の
 如來堂あり、常瑞不心自殺の死主君と共に腹切、栗飯原右衛門尉子
 るが、久しく胤直を練られ、胤直家督と兼嗣あり、彼兩人も随ひ來て第一の
 權門とあらん、狄あつらん、あつらん、權勢を削られて、外甥とく朽を、ゆは、
 縁連は血氣の杜、仗ぬ、死思慮あり、ね、謀る、難くも、ゆ、ゆ、め、れ、ど、心
 憎た、胤直、度、要、る、む、む、と、密々、謀、を、旋、り、て、これ、より、の、後、時、々、赤、塚、不
 赴、た、く、胤直、の、安、否、と、伺、ひ、栗、飯、原、龍、山、の、西、老、黨、ホ、と、他、事、知、れ、ず、
 交り、一日、常武、實胤、の、宝、庫、より、あ、り、山、とい、ひ、一、節、截、を、潛、り、小、こ、り
 出、し、を、懷、し、赤、塚、を、栗、飯、原、が、宿、所、に、赴、り、密、議、あり、と、倡、へ、て、あ
 ト、兩、室、に、對、面、し、互、に、其、け、す、あ、り、守、の、仰、よ、う、と、言、ふ、言、ふ、あ、り、ば、や。

此度侍我殿と両管領家とわん和睦の風聞定之守の近死程の家督を
 赤塚殿をり自衛の譲りぬんと思召定められぬ。さ月管領の助力ありといふ
 とも今さう侍我殿より多く思われぬ。さういふ後安ふべき。されが
 彼わん和睦のゆ。世に披露ぬ先は使者を侍我殿へ進ませぬ。後
 ぬらう一かば。されども石濱より遣ふ鎌倉への言え影護。自胤
 より遣ふ何れぬ疑ひ死就く侍我殿へ進ませぬ。牽出物の當家
 本國の離れよりさる重器も。この一節截り乃祖自胤の死時より
 相傳のゆゆ。脚所も知。カコるれば。これを進ませぬ。この餘の物を
 自胤のころ。相添へた。然るゆ。尤密議され。故竊自胤度が宿所
 赴死く予が意。海へよと仰られて。いと實言。やふ説示。一件の笛を遣
 まよわん胤度針る。む欽び。一点も疑ひ。も仰の趣有。死せ。まよ
 ひぬ速。おぼえ。ゆげ。仰のまゆ。相計ら。其侍我へ赴。帰城の後。彼
 処の首尾を。中上ひり。この弋宜。わん執成を。憑。ると。答。り。常武。を
 護。済。一。と。と。ろ。ろ。の中。は。含。咲。く。石。濱。へ。も。還。り。け。却。説。粟。飯。原。胤。度。へ
 その日自胤の。同。り。入。り。多。り。く。馬。加。常。武。が。傳。へ。る。實。胤。の。密。山。意。を。演。て。件。の
 笛。を。進。せ。せ。自。胤。感。悦。大。く。さ。る。石。濱。殿。の。お。ん。計。ひ。其。を。思。い。ゆ。ま。
 わん慈愛。する。ゆ。れ。を。い。ろ。う。違。背。致。ま。き。現。侍。我。殿。へ。牽。出。物。は。笛。の。ま。よ。
 い。ゆ。わ。ん。今。一。品。の。何。を。欲。得。と。お。り。ひ。ろ。う。問。あ。へ。胤。度。要。時。沈。吟
 一。く。晝。表。は。某。鎌。倉。へ。わん。使。を。派。り。折。り。彼。地。へ。購。得。は。長。短
 二。口。の。刀。の。焼。刃。尋。常。る。さ。る。と。り。く。その。後。進。上。仕。り。小。笹。落。葉。と
 名。つ。け。ら。ま。く。と。く。脚。秘。藏。あ。る。ま。く。と。や。彼。兩。刀。丁。を。然。る。ま。れ。と。い。ひ。ゆ
 果。ぬ。自。胤。と。頻。ふ。領。死。微。咲。く。彼。大。刀。の。伝。を。忘。れ。り。牽。出。物。の。ま。よ

此度侍我殿と両管領家とわん和睦の風聞定之守の近死程の家督を
 赤塚殿をり自衛の譲りぬんと思召定められぬ。さ月管領の助力ありといふ
 とも今さう侍我殿より多く思われぬ。さういふ後安ふべき。されが
 彼わん和睦のゆ。世に披露ぬ先は使者を侍我殿へ進ませぬ。後
 ぬらう一かば。されども石濱より遣ふ鎌倉への言え影護。自胤
 より遣ふ何れぬ疑ひ死就く侍我殿へ進ませぬ。牽出物の當家
 本國の離れよりさる重器も。この一節截り乃祖自胤の死時より
 相傳のゆゆ。脚所も知。カコるれば。これを進ませぬ。この餘の物を
 自胤のころ。相添へた。然るゆ。尤密議され。故竊自胤度が宿所
 赴死く予が意。海へよと仰られて。いと實言。やふ説示。一件の笛を遣
 まよわん胤度針る。む欽び。一点も疑ひ。も仰の趣有。死せ。まよ
 ひぬ速。おぼえ。ゆげ。仰のまゆ。相計ら。其侍我へ赴。帰城の後。彼
 処の首尾を。中上ひり。この弋宜。わん執成を。憑。ると。答。り。常武。を
 護。済。一。と。と。ろ。ろ。の中。は。含。咲。く。石。濱。へ。も。還。り。け。却。説。粟。飯。原。胤。度。へ
 その日自胤の。同。り。入。り。多。り。く。馬。加。常。武。が。傳。へ。る。實。胤。の。密。山。意。を。演。て。件。の
 笛。を。進。せ。せ。自。胤。感。悦。大。く。さ。る。石。濱。殿。の。お。ん。計。ひ。其。を。思。い。ゆ。ま。
 わん慈愛。する。ゆ。れ。を。い。ろ。う。違。背。致。ま。き。現。侍。我。殿。へ。牽。出。物。は。笛。の。ま。よ。
 い。ゆ。わ。ん。今。一。品。の。何。を。欲。得。と。お。り。ひ。ろ。う。問。あ。へ。胤。度。要。時。沈。吟
 一。く。晝。表。は。某。鎌。倉。へ。わん。使。を。派。り。折。り。彼。地。へ。購。得。は。長。短
 二。口。の。刀。の。焼。刃。尋。常。る。さ。る。と。り。く。その。後。進。上。仕。り。小。笹。落。葉。と
 名。つ。け。ら。ま。く。と。く。脚。秘。藏。あ。る。ま。く。と。や。彼。兩。刀。丁。を。然。る。ま。れ。と。い。ひ。ゆ
 果。ぬ。自。胤。と。頻。ふ。領。死。微。咲。く。彼。大。刀。の。伝。を。忘。れ。り。牽。出。物。の。ま。よ

本七名物語
 の巻の
 栗飯原首
 流度流此の如
 この本はハ三
 の巻の
 首官
 合せ見ると



八代将軍
 徳川吉宗

共

徳川吉宗

八代将軍
 徳川吉宗

徳川吉宗

救ひぬこの使立人の目もさうさ誰うとせん疲勞さうさあはげや。
 と亦他事もさう宣へぬ流度全然とさち笑く仰むくとも既ふとや用
 意を致しう。明朝度足仕らんといふは自浪飲びく次の間も侍りう。
 近習の者ふあうゆさうく小の條落葉の両刀と嵐山の笛のろ共は流度よ
 遍与しあへぬ流度これを受とりてそく宿所も退死に。その日の中ふ
 細工人ホは笛と両刀を装らるるに相両二箇造りて猛小救正を行
 装も現戦國とく逸早に乘馬持鎗甲冑櫃命ハ今宵一節切小
 條の雪吹消もく其処は落葉の両刀を携さる若黨二名と後者を
 べて十人なり。その詰見まらうの許我を望てを起けける畢竟流度許我使
 とて又甚麼るる話説うあつ。その巻も著しうる出像とてその大さを知らん。

里見八犬傳第六輯卷之二終

六編六巻之内二

清見院

